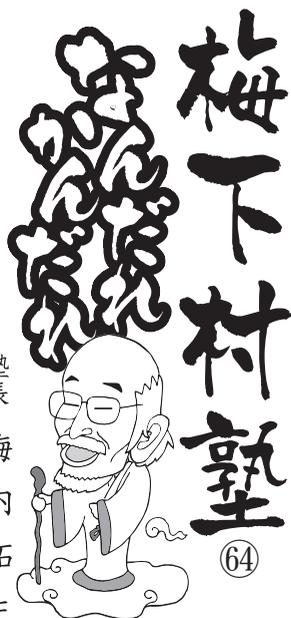


「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～



塾長 梅内 拓生

(自然と震災認識として社会対応の気仙からのメッセージは国内外に広まっている)

2月8日に東京都千代田区の日本都市センターで平成24年度さんりく・大船渡ふるさと大使懇談会が開催されました。2011年3月11日の東日本大震災を被り、そこから復興の努力を続けているふるさと大船渡の取り組みへの協力に関する話し合いが中心でした。いろいろな世代のふるさと大使の方々が、その年代で出来るいろいろな支援活動を熱心に行っている報告に感動しました。私は昨年の5月に「森と水と命の惑星」国際会議を大船渡市と気仙沼市で開

催しました。この国際

会議では東日本大震災を地球の地殻運動の一つの現れの視点から、これに対応するための自然認識と地域文化教育との視点から可能な国際協力に関しての話し合いが行われました。

国際会議を始め、その後の活動は東海新報のコラム「梅下村塾」に連載しており、これが契機となってこの活動は、東京都の西多摩新聞が注目して西多摩地方に地域文化教育プロジェクト「にしたま文華塾」活動を行っておりです。東南海大震災が考えられている四国高知の高知新聞も東海新報と西多摩新聞の地域文化教育に興味を

示しております。

3月には、このための打ち合わせ会議が予定されておりです。WHOなどの国際機関や、国際学術ジャーナルを介しての広報活動の準備も進んでおります。

(気仙の椿)

つばき島、カメラアホール、世界の椿館・碁石、など気仙では「つばき」が親しまれております。敷椿は日本が原産地と言われております。

気仙の三陸沖は親潮と黒潮が交わる場所でありです。気仙の椿は世界に根を張ることが出来るような植物学的遺伝子と、文化的遺伝子の両方を持っているのではないかと考えると、気仙の椿を介して世界が交流する未来が開けて来る夢が膨らみます。

たれました。それは気仙の自然の中に咲いている花と歴史の奥にある心に触れるものを感じたためかもしれませ

んと。
(蝦夷アイヌの地名と自然認識)
山田秀三氏は著作の「アイヌ語地名の研究」で次のように述べている「第一に気がついたことは北海道地名の型である。」

周知の通り、ナイ(川)で終わるものが多いし、過半数の地名が僅か数種の語尾で終わっている。東北地方の不思議な地名の方も集めてみると、やっぱり似たような語尾である。どうも似た型の地名で、つまり同じような言葉の地名だったらしいことを地名全体の型から覚えた。

縄文時代の三内丸山遺跡には大型の木造建築物があり、高度な建築技術を行使しており、大きな集落を形成していたと考えられている。しかし、縄文文化は王国は作らなかつた。即ち、身分制度社会は作らなかつたと考えられている。

この視点に立つと、縄文の自然認識とは自然の中の共通のものを取り出して、縄文の世界像を把握していたと考えられる。即ち、相の共通なもの把握である。

(自立と共生への協力)

これは生活の場の領土的拡張の概念ではなく、お互いが話し合い、納得して、共同管理する概念に通じるものである。即ち、住んでいる地形と地相から、これに対応する生活システムを構築することにつながるのである。いわば帝国主義的拡張や独占の抑制の文化である。

人口増加、地球環境汚染、帝国主義的拡張など現代文明が抱え込んでいる深刻な問題の対処には、数千年から数万年前に人類が積み上げてきた知恵をもう一度見なおすことが必要であると思う。

には「三陸の気仙の地名物語 ケセンきらめき大学地元学部長 熊谷 章」が連載されている。この物語が数千年から二万年以上前の気仙の先祖が育んだ自然と人間社会への知恵の発掘につながることを願っている。

米国ロスアンゼルスからの協力、地元小学校の同級生のグループによる生活支援物資の協力、芸能グループあるいは個人としての協力、自然認識や地域文化価値教育の推進への協力、国内外のものを介しての協力などいろいろです。ふるさと大使の方々の、故郷への熱い思いと行動に強心を打たれました。